

---

# ここが願いの終着点

水沢 流

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ここが願いの終着点

### 【Zコード】

Z6804Y

### 【作者名】

水沢 流

### 【あらすじ】

「異界に行つたら、理想の自分の姿になるのがセオリーじゃないの！？」

異世界に落ちた途端、なりたかった自分そっくりの「他人」と対面しちゃいました。

自信なし、学力なし、やる気なしの三拍子揃つた主人公が「理想の自分」と繰り広げる異世界での物語。

シリアル＆コメディじゅちゃまぜ、メインはボケツツコハ多めです。

## 死ねばいいの！」

ドオン！ と派手な爆炎が上がった。

ブツ飛ばされるクリーチャーの群れ、じつぱみじんに砕け散る窓ガラス。

豪快に爆裂したビルの中から、銀月の夜空へと男のシルエットが跳ね上がる

「イヤツハア！」

高らかに歓喜の声を上げて、片手にひつつかんだクリーチャーを地面へと叩き付ける男。

ザンシ、と着地したそいつの足元で、砂塵と化したビルの破片が散った。

「ただいま、セー！」

にイとワイルドな笑みを浮かべた男がアタシに言つ。

黒髪に赤い瞳。引き締まつた体。

そいつに向けて、アタシも笑つた。

たつた一言 そりやもう、最高の笑顔で、

「死ねばいいのに」

アタシは晴子。ごく普通の学生だ。

いや、学生だった。

それがちょっとした事でこの世界に来て、帰れなくなっちゃつたりする。

特別な血筋とか、世界をどうするるために呼ばれたとか、別にそんなやつじやない。

まあ、その話は後にするとして。

ここはゲルナーム。アタシの住んでいた世界からすれば立派な異世界だ。

で、ここアタシのパートナーと言つか、腐れ縁になつた野郎がJ。

最初に会つた時は、どつかの俳優かとマジで思った。

そう言つ外見だ。

軽くメタル入つた格好も、違和感無くキマつてゐる。

黒いライダースーツに金具を絡め、襟元を大きくはだけさせた独特のスタイル。

アタシ達の世界なら、そつまつのが好きな奴に追いかれられそうな姿だ。

けど、アタシはどつこもコイツと相性が悪い。

「ちょっとは愛想良くしようぜー、レーティ

ずかずかと歩くアタシを、良く通るハスキーボイスが追いかけて来る。

振り返つざまにそのシラを睨んで、アタシは溜息をついた。

「ビルまる」と吹つ飛ばしといて良く言つわ。謝れ。とにかく謝れ

「それもそうだな

「わかれよし」

「悪かつた」

シユタ、と片手を上げてが詫びた先は、

「おいコラ待てや」

誰が爆心地に謝れと。

「……もういい、怒る気なくした」

ふう、とため息をついて遠くを眺め、聞こえて来るヘリの音に耳を傾ける。

あー、空が綺麗で目が痛いわ。この痛さは明らかに煙のせいだけ

ど。

「何でアンタなんかと、なあ……」

男嫌いで近所中に知れ渡つてたアタシが、よりもよつてコイツとだなんて。

別に男にトラウマがあるわけじゃないけど、乙女ちっくな事ばかり望まれててウンザリしたんだよね。うん。

「つれねエなア。あんまり怒つてると可憐さに欠けンゼ？」

「そりやあ悪かつたつ！」

涼しげな顔でほざくつに、適当な瓦礫をブン投げる。  
ぱし、とそれを片手で受け止めたの、やつたら余裕の顔と言つたら！

むかつぐ。マジむかつぐ。鼻血ぐらじ出せよ、せめて。

フンと鼻を鳴らして背中を向け、アタシはまた歩き出した。

「ほんつと、死ねばいいのに」

殺しても死なないような奴だけじゃ。

初めてこの世界に来た頃、アタシは色々な事に腹が立つてて、目の前に現れたクリーチャーに怯えるより前に、こんなふざけた死に方があるのかつて頭に来た。

それで思った。

どーせ死ぬんだ、全部くたばれ！

目の前のクリーチャーも、偉そうに建つてやがるビルも全部、ブツ壊れちまえばいい！

そう思った瞬間、飛び出して来たJがそいつをやつてのけた。  
ポップコーンみたいにクリーチャーが吹っ飛んだ。  
ビルが、サクッとスライスされて崩れ落ちた。

ゲームでそつまつ場面を見た事はあるけど、マジで見たのはそれが始めて。

良く出来たセットじゃねーのと思った途端、Jの破壊旋風が終わつた。

「。ただの」。

ジャックとかジョーカーとか、みんな好き勝手に呼ぶ。早足で歩くアタシの後ろを、のんびりと着いて来る」。アタシは先を歩きながら、せめて何かにつまづいてコケればいいのにとか、そんな事を考えていた。

そうこうしてるウチに、風を切るプロペラ音とエンジン音がけたましく鼓膜を叩いた。

ふと落ちた影の下から、額に手をかざして上空の音源を見上げる。機体の横に、吠え猛る龍の模様が刻み込まれたペリは、アタシ達の雇い主であり家主でもあるアテリアさんのもの。

「早い迎えだな」

「そりゃあ、アタシが呼んだから つてちょっと待て！」

制止間に合わず、すいと持ち上げられるアタシの体。

次の瞬間には、体が浮いた。

いや飛んだ。アタシが飛んだ。

気付けば重力とは逆方向に、ぽーんと花火のように打ち上げられてました。

「ちょ、」 ツ！？

みるみる遠ざかる地上で、アタシを跳ばした張本人が笑ってる。その爽やかスマイルを見下ろして、アタシはスウと息を吸い込んだ。

「ここ」でアタシが唯一使える能力。といふか変換機を介して使えるようになった能力。それが、

「ふつざけんなこの……」

いわゆる大声を破壊力にするつて奴で、

「クソツタレがーっ！」

叫んだ途端、グワツと辺りの景色が大きく歪む。

直後、ビル1本分の十円ハゲを作られた街に、五百円ハゲぐらいのクレーターが爆誕した。

「大丈夫？ セー」「ちゃん」

「あ、ありがとうございます……アデリア、さん  
ゼーはーゼーはーゼーはー。」

空中に紐なしバンジーされたアタシを拾ってくれたヘリの中で、息も絶え絶えに返事をする。

「……死ぬかと」

生きてますか。

一瞬、マジでお花畠見えたよと胸に手を当ててへたりこむ。  
倍速再生されてそうな心音が指に伝わって、どれだけ自分がビビ  
つてたかを再認識。

それを落ち着けながら大きく息を吸つて、アタシはアデリアさん  
に提案してみた。

「」の奴、ここに置いて行きません？」

そう言つた途端、ドン、と言つ重い音と共にヘリが揺れる。」だ。

「……アンタ、ヘリ必要なくね？」

ひょいと顔を出し、ヘリの上に着地している」に声をかける。  
と、くあ、とのんきにあくびをかました」が、その表情のままア  
タシを見た。

「……眠くて」

「落ちてよろしい」

親指を下に向けたアタシに、」が片手をヒラヒラと降る。

それを見届けて、アタシは窓から頭を引っ込めた。

ふと気付けば、アデリアさんが妙に微笑ましくアタシを眺めてい  
る。それに何となく気まずさを覚えて、アタシは外へと視線をそら  
した。

アテリアさんは、いわゆるラテン系のおねーさんまだ。褐色の肌に彫りの深い顔立ち、黒の瞳、そして豹を思わせるしなやかさを備えたスレンダーな体つき。

見た目に反して、戦闘のプロフェッショナルでもあるおねーさん。そんな彼女の顔を映す窓を通して、アタシはぼんやりと空を眺めていた。

## ゲシュペンスト

うーん、景色がいいつ！

マンションの最上階、青空間近、見晴らし抜群のスイート・ルームに到着するや否や、やほほつた上着を放り投げて窓に駆け寄る。広々とした大きな窓から見る世界は、まるでドラマの一場面のよう。

そんな贅沢感溢れる部屋こそが、アテリアさんとアタシ達の住む場所だ。

…や、持ち主はアテリアさんですね。

スピーカーから流れるボサノバも、広々としたリビングも、何もかもがセンス良くまとまっている。

普通、こう言う部屋って成金趣味でケバくなるもんだけど、そうならねえのがアテリアさんらしさなんだわ。

「ねー、アテリアさん」

「何？」

「じつて……つまり、何？」

ひとしきり景色を堪能した後、カウンターに歩み寄つて椅子に腰掛けるアタシに、キッチンに立つていたアテリアさんが振り返る。

先進文明　なんて言うともつとメタルちっくなイメージなんだけど、そう言わなければわからないぐらい、ここにはアタシの世界そつくりな日常があった。

良くわからんが、ここはそういうアララらしい。まだ他に行つた事はないけれど、この世界」とゲルナームには、場所ごとに地方色みたいなものがあるそうだ。

ようするに町の雰囲気を大事にしましょう運動みたいなもので、アタシ達の住んでた町のような雰囲気を作る事が、この場所の売りであり特徴らしい。

「せっかくだし説明するわ。あ、ヤーハリやん何か飲む？」

そつたずねてくれるアデリアさんに、じくつと小さくうなずいてみせる。

それから数分もしないうちに、アデリアさんが銀色のケトルの湯をティー・ポットに注いで、紅茶を一杯淹れてくれた。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

シンプルな白いカップが、渋味の少ない紅茶のはちみつ色を引き立てている。

あ、いい香り。

「普通に湯で淹れるんですね…」

「そうじやない方法も取れるけど、じつの方が好きなのよ」なんか落ち着くでしょ？ と言いながら流れのよつな動作で椅子に腰掛けたアデリアさんに、カップ片手にうなずいてみせる。

確かに、映画みたいにウイーンつて機械でカップが降りてきても雰囲気出ないですもんね。

「セーラちゃん、音叉って知ってる？」

「音叉は……何となく。叩くと音が共鳴するってアレですよね」

いまいち自信ないけど。と、口元をじまかすために紅茶を一口する。

それはどうやら正解だったみたいで、アデリアさんが笑顔でうなずいた。

「Jはね、ゲシュペンストなのよ  
げしゅ…？」

唐突にアデリアさんから告げられた単語に、お勉強二ガテな脳内が一気にオーバーヒートする。

そんなアタシの表情を見てピンと来たのだろう、アデリアさんが「種族名みたいなものよ」と解説を入れてくれた。

「セーラちゃんみたいな人がね、時々、こつち側に流れて来るの。そうするとゲシュペンストが対で生まれ、Jみたいなのができるてわけ」

そんな風に言うアーテリアさんの口調は、ずいぶんと言葉を選んでいるような調子だった。きっと、もつと複雑な仕組みがあるのを、アタシに合わせて簡単に言い直してくれてるんだろう。

「で、セーラちゃんとの関係は、その音叉に近いわ。共鳴者の人が精神活動していないと留まる、共振の石」

「石…ねえ」

そこで雑誌読んでるあれが石コロですかい。

長身の体をソファに横たえて、頬杖付きながら堂々とまあ、余裕なこつて。

「活動しないと停まるわりにや、アタシが寝ても動いてますけど。あれ

「一回共振すれば、当分動けるのよ」

「…はあ」

わかるよーな、わからんよーな。

とりあえずアタシが来たからーが生まれて、アタシが死ぬか何かして精神活動が停止すると、ーもいすれ消える。

ともかく、そう言つ事らしかった。

と言つか、それぐらいしか理解できませんでした。はい。

「んで、アタシが来てーが生まれたとして」

「ええ

「最初からあの格好で生まれて来るんですか?」

「違うわ。『原野』『深層』『集合意識』『混沌』『堺堀』…まあ、私達ミーディアムによつて呼び名は色々だけど。ーはそこから私が拾い出したの」

「…」

「世界が違えば、呼び出したとか召喚したつて言つのかしらね。ゲシュペNSTつて最初実体がなくて、波長が合つ形にしか固着しないのよ。ゲシュペNSTの望む形をどこまで構築できるかが、私達の腕の見せ所ね」

「…はあ

つまり、気に入った器にしか入らない幽霊みたいなモノですね。じつ、日本人形の髪質が気に入らないと宿らない呪い子さんとか。なんて贅沢な奴なんだ、と腹が立つてくる。アタシらなんて、見た目選んで生まれて来れねえっての。」

「不公平だ」

ぼやき、相変わらず悠々と雑誌読んでる」をチラ見して、ふう、と大きく息を吐く。

そんなアタシの小声が聞こえたのか、アーテリアさんがエキゾチックに微笑んだ。

「セーロちゃん、なりたかった自分つてある?」

「……ええ、まあ、一応は」

オンナオンナ言われるのが腹立つてたんで、自由奔放に生まれたかった。

それで、できれば女じやなくて男が良かつた。ちっさい背丈が嫌だつたから、できれば高めの身長で、運動能力は抜群が良かつたよ。

「……」

思わず、視線が」と合ひつ。

いやいやちょっと待て、違う違う。何かが違う。違いませんかアーテリアさん。

慌ててぶんぶんと頭を振るアタシに、アーテリアさんがくすくすと笑う。

「……やな予感がした。

「まあ、あなたのなりたかった自分って事ね。とても簡単に言つと、そういう存在よ」

はい?

思わずぽかーんとしたアタシの目の前で、にじにじとアーテリアさんが笑つてゐる。

ああ、何てまぶしい笑顔。

美女の笑顔つて、こんなに破壊力のあるものなんだろうか。

その手の趣味はないけど、屈託なく笑うアーテリアさんの前では何

も言えなくなる。

直後、ぶわっと頭に血がのぼった。マジで。

「……」

思わずまた」を見る。

あれがアタシの理想？ って言つか、アタシの理想ってあんなチヤラ男じやねえし、だいたい今の言葉って」に聞こえてんじやねえの。

むしろ最初から知つてたとか そういうと、じつちが落ち着かなくなつて来るんですが。

「……あの」

「なあに？」

ほがらかに聞き返して来るアテリアさんから視線をそらし、思わず下を向く。

それから、アタシは机の下で指を組んで、ぼそぼそと小声でつぶやいた。

「……それ、ずるくないですか」

いやだつてホラ、異世界召喚つてのは普通あこがれの自分になれてバンザーリー！とかそつ言つのがセオリーつづかなんつづかですね。

そう思つている間にも恥ずかしさと腹立しさで顔面が熱くなつて来て、反射的に椅子から立ち上がる。

「……、ちょっとベランダに出てくれる？」

「いいけど」

不思議そうな顔でベランダに移動した」に、つかつかと歩みよるアタシ。

そして

「納得いかんわーつ！」

泣き笑いの激情をありつたけ込めた絶叫の砲撃で、アタシは」を大空に向けてかつとばした。

「何か、じつして見ると異世界って気がしないよな……」

マンションから出て、夕暮れ通りを歩きながら辺りを見渡してふと呟く。

見えるのは普通の公園。普通のブランコ。普通の街路樹。普通の家。

「……」

このまま真っ直ぐ行つたら、見慣れた通学路に出るんじゃないかなとさえ思えて来る。

それぐらい、ありふれた光景がそこにあつた。

「……実感わかねー」

先日、盛大にビルごとにぶつ飛ばされた辺りが、もう何事も無かつたかのように公園と化している。

そこに足を踏み入れ、ベンチに腰掛けてアタシはふらりと空を見上げた。

だんだんと暗くなつて行く空もまた、見知った町そつくりだ。それを眺めながら、アタシはココに来た日の事を思い出してた。

最初は、本気で死ぬつもりだった。

別に死にたくなるほど嫌な事があつたワケじゃない。

ただ何となく、面白いと思える物が減つていた。

テレビつければくつだらしない暗いニュースばかりで、天気は例年に無い何とかかんとかで。

その例年つていつよとツツコミ入れたつて、ビーセリポーターは答えちゃくれない。

不況がどーたらこーたらでお先真つ暗、恋愛記事は男女の妄想の

吹き溜まり。

なんたら活動つて何それ楽しいの、それでもつて親はまつるせえし  
束縛するしでうござりだつた。

「ねー、セイ」

「何」

不意に話しかけて来た幼馴染、純子の方へと顔を向ける。

彼女はバリバリのギャルだ。

純子つて名前が気に入らないからジュンと呼ばばせる。

周りにも、アタシにもだ。

そして、アタシの晴子もセイと呼ぶ。

アタシとは全然見た目も違う、趣味も違う。

なのに、何でかジュンとは付き合いが長くなつた。

何でつて言われると良くわからんけど。

「三丁目にある、怪の落書きってのがあつて。それ見ると次の日異  
世界に行けるんだつて」

「ふうん」

「こつちの肉体は死んじゃうつらじいけどね。ねえセイ、見に行こう  
よ。見れたら最高じやん?」

「ハア?」

思わず声が裏返つた。

何言つてんの、ジュン。

お洒落して、ダチと騒いで。アタシよりずつと充実した人生送つ  
てそうなのに、一体何なの。

やりかけのゲームのコントローラーを放り投げ、顔だけそつちに  
向けて眉をひそめる。

画面では今まさにイベントがクライマックスに突入する直前だつ  
たが、そんな事はどうでもよくなつていた。

「セイ、あのね」

膝の間、綺麗にデコつた爪を揃えてジュンが笑う。

フリルスカートの花の中、宝石みたいにキラキラと爪が光つてた。

「何かさあ…飽きちゃつたんだ」

「飽きたあ？」

「んー、先が無いって感じ?」

ジューンはあんまり、言葉選びが上手く無い。

「ちー子もサツチもガツコのみんなも嫌いじやないけどさ。何だろ付き合い続けて行こうと思つたら、興味無い話題でもとりあえず付き合わなきゃじやん」

「まーね」

それが嫌だからアタシはネットを居場所にしてる。  
めんどくさくなつたら逃げられるし、三次元に王子様探すほど、  
自分をわきまえて無いわけじゃない。

それでも、それなりにネット内で付き合いはあつたし、ゲーム仲間で盛り上がりがつたりで、まあ退屈はしていなかつた。

充実してゐかつて言わると、正直、微妙だつたけど。

「ジューんらしくないなあ、どうしたんだよ」

「んー、だつてやつぱりカレシ出来たら女の友情よりカレシじやん? 何つーの…むなし…」ってかさあ

「…まあね」

ネットに広がるどの記事を見ても、現実に満足している大人なんていらない。

大人つていいなー、なんて憧れるお子様時代はとつくに終わつてる。

判るのは、腐つた現実に向かつて阿呆みたいな世間体氣にして、  
そんでババアになつて死ぬだけだ。

大人になつたら判るとかほざいてる連中見ると、全つ然判りた  
くねえと思つ。

無料ゲームも世にあふれてるけど、一周しちまえばそれでおしま  
い。

新作新作つて騒いでも、どれも似たり寄つたりだ。

「いいよ

だから、その噂に対してもOKしてみた。

良くある話だ。あの世と繋がっている門とか、死んだら実は異世界に行くとか言つ系統。

半分信じて、半分信じちゃいなかつた けど、今本当に『この世界』にいた。

ジョンがどうなつたかは知らないけど、少なくともアタシは『異世界』にいた。

最初は自分を疑つた。

実は事故に遭つて、アタシはどこかの病院で寝てて。これは、そんなアタシが見ている夢なんじやないかつて。でも、疑つても疑つても夢が終わる事はなくて、結局、考えるのがめんどくさくなつた。

いつか醒めるなら、醒めるまで勝手に続けばいい。

……そう思つたら、ちょっとだけ気がラクになつた。

「こつちでも、空は同じなんだな……」

背凭れによりかかり、そんな事をぼやいていると、ふと、後ろから影がさす。

ぐるりと振り返ると、そこに一がいた。

「よつ、ハジメ。セーラー。腰痛か？」

「……殴るよ」

人が感傷に浸つてゐる時に空氣読めよ。

と言つうか、それ以前の問題にだな。

「なあ」

「うん？」

「アタシに用事ある時は寄り道しないで真つ直ぐ来いつて言つたな」

「ああ」

涼しげな顔でうなずき、背後のしげみを指差す。「そこに、ぱつかりと切り開かれたしげみがあった。公園の外からここまで ただまつすぐ一直線に。

「大型トレーラーがアンタはつ！」

「誰が道路からしげみブチ抜いてまつすぐ来いと行った！ ぜえはあと声を荒げ、深々と息を吐ぐ。

「いくら戻るつて言つても、アタシ、そのしげみに同情するわ……ほんと、ひつどい姿になつちやつて。 猫にむしむしされた後のカーペットみたいじゃないの。

「それで何、また仕事？」

「『名答。ビーセヒマだろ、付き合えや

「……」

「どした？」

「……なあ

「おう

「アタシをのんびり寝させろやあー！ 『のアホンダラつ！』

「昨日今日で仕事に駆り出すな、一度寝させろー！」

「そんな、仕事まみれのサラリーマンみてえな事を叫ぶアタシの声が、むなしく夕暮れに溶けて行つた。

「アタシ、アデリアさんいなかつたらお前のお供なんか絶対やんねー…」

お仕事、もといクリーチャー狩りの支度を着々と進める一人を見ながら、そもそもとケーキを齧る。

ささくれた気分を落ち着かせてくれるキャラメルケーキがやけに美味かつた。

アデリアさん……お菓子作りの腕まで反則的だわ。  
なんて思つてたら、

「ライサもいっしょに行ぐー」

ふわつふわの金髪にドレスを着た少女が、ひょつこりと顔を出した。

ライサ。

「う見えても立派な兵器で、廃棄寸前だつた所をアデリアさんが拾つて来たらしい。」

姿はアデリアさんの趣味だと言ひ。ぱつと見た感じ、お人形さんみたいな姿だ。

白いフリルのついた薄桃色の服は綺麗にギャザーが寄せられ、小柄な体をひときわ愛らしく見せてくれる。

アデリアさん……大人びているんだか、乙女ちっくなんだかわからない人だとこう言つ時に思う。

「ライサは留守番でしょ？」

「だめよ、とライサをさとすアデリアさんから隠れるよひにして、ふわりとライサがアタシの後ろに隠れる。

「やー。せいこといっしょに行きたい」

ちつちつな手をぎゅっと握つて、田をつるませるライサのかわいい事！

思わずきゅんとなつて抱きしめかけたアタシの前で、ライサが言

葉を続けた。

「こもだいすきだもの」

……おい？

何か今、聞き捨てならん事を聞きましたが。

「オーケイ、ライサ。後で俺が遊んでやるよ」

おいおいおいおい。

何でお前がそこで流し田使つんだ、」。

「何だセー」「、嫉妬か？」

つ！

「誰が嫉妬しとるかボケえ！」

そのおめでたい思考回路を今すぐ水で洗いなおして来い！近場にあつた空容器をブン投げて、アタシは息を荒げた。

「この、阿呆。ほんつと、死ねばいいのに」

生身の人間」ときが、殺せる相手じゃないと理解はしてるけど。いつか泣かせてやると、アタシは内心で拳を握りかためていた。

19

「用意はいい？ セー」「ちやん」

「はい」

高台の上、仁王立ちになつたアタシが硬い声で応じる。  
仕事で入つた先 ゴーグルを通して見る世界は、肉眼で見るそれとは随分と違つた。

無機質な荒野に、奇妙な建物がまばらに立つ世界。そこにはひん曲がつた植物のようなものや、謎のモノリスのようなものまで見える。

アテリアさんいわくナイダス。つまり、クリーチャーを生み出しているこの場所の本当の姿だそうだ。

ゴーグルを取れば、沿岸に美しい海を青く寝かせた、真っ白い建物が並ぶ地中海風の情景にも見えるのに。

その素顔がこんな異様なものだと思うと何だか切なくなってくる。ちなみに、敵が来たら真っ先に見つかりそうな場所にアタシが立つているのにはワケがある。

アタシみたいな「来訪者」は彼らから見えにくいらしいのだ。やがて視界に次々と入り始める光点で、クリーチャーの位置を確認するアタシに声がかかる。

「セー！」

「何？」

「マガジンの次の発売日、明後日だよな？」

「……」

「この、バカ……つ。

「黙つて仕事しろやあ、このスットコドッコイ！」

怒りの声を爆発させるアタシの耳元、イヤホンから」の余裕の笑い声が聞こえた。

」達の位置と、敵の位置。

アタシにはそれらが光点に見える。

このセンサーを使ってクリアにそれらを判別できるかどうかは人の素質による と言うと聞こえがいいけど、メガネの度が合つようなもの、とアデリアさんは言つてました。

……確かにド近眼だけじゃ。

こんな場所でまでメガネと相性いいなんて超泣けるんですけど。

「セー！」ちゃんと、見える？」

ひつそりと落ち込んだアタシの意識を、アデリアさんの声が呼び戻す。

それに応じて、アタシは視界に意識を集中した。

「見えます……一、五、二十、百オーバー……アデリアさん、来ます

！ 気をつけて！」

叫ぶアタシの声が終わらない内に、ぶわっ！ と映る光点が一気に倍増した。

その群れが突き進む先にはJ達がいる。

ケタ外れの再生能力を持つているJは別として、アデリアさん達に傷を負わせるワケには行かない。

「ライサも！ 来るよっ！」

叫び、アタシは「見る」事に全てを集中した。

ゲーマー甘くみんなつ！ だてに弾幕シュー・ティングやつてねえ！ 乱舞する光点の中、アデリアさんやライサを自機に見立て、衝突を避けるルートを視線だけで辿る。

すぐさまアタシの眼球の動きがデータ化され、アデリアさん達へと飛んだ。

それを頼りに一人が群れる光を潜り抜け、安全なポイントまで抜けたのを確認して叫ぶ。

「アデリアさん！」

「了解！」

「ライサ！」

「はいっ！」

勢いのある返事二つを追いつに、消え去り始める光点の群れ。

それは、アデリアさん達が敵の撃墜を開始した事を示すものだつた。

## ナイダス

「セーハちゃん、後は大丈夫！」  
ミライシードから聞こえるアデリアさんの声を拾って、パネルスイッチを切り替える。

途端に視界の端のほうに光点マップが縮んで、すっと鮮やかな景色が目の前に広がった。

アデリアさんの目で物を見て、アデリアさんの動きを感じる疑似体験。

もつともアタシがアデリアさんを動かす事はできないし、本当に重なっているわけじゃない。

アデリアさんの視覚触覚を拾ったナノマシンの信号を、アタシのゴーグルも同じミライシードが受信して、脳にそう見せているだけ。

強制的な白昼夢、人工幻覚と呼んだほうが近いんだろう。この場合。

もちろん、画面の前もとい高台の上にはアタシがいる。体だってある。

重なっているのは感覚だけだ。

「……」

間近で見るクリーチャーは、案の定、お世辞にも綺麗とは言えない姿だった。

いわゆるモンスターと呼べる、鳥獣っぽい姿。

時に機械と肉体が混ざったその姿は、人によつては見るだけで卒倒しそうな外見だ。けど、アデリアさんは平然としたもので、その手の映像に慣れたアタシもまた平氣だった。

『さあ、いらっしゃいな！ 悪戯っ子！』

色氣のある声を放つたアデリアさんの視野に、迫り来るクリーチャーが映り込む。

刹那、タン！ とアデリアさんの細い足が地を蹴った。

高々と跳躍したその体を追つて、下方からバネ仕掛けのように次々と跳ね上がつて来るクリーチャー。

それを見下ろして笑い、両手に持つた拳銃を振り上げる

『おやすみ！』

高らかにそう叫び、下方へと銃口を向ける。

そこから続く連射の雨を浴びて、一瞬でクリーチャーが四散した。ざまあ。

即座に右へと視野を流す。と、勢い良く滑空して突つ込んで来るクリーチャーが見えた。

だけど甘い！ この腕、この指による反応の準備はすでにできている！

『せつかちね？』

甘く囁き、クルリと回した銃の照準を合わせて即座に一撃。

それに撃ち抜かれて軌道を狂わせたクリーチャーを足場に定め、その頭を踏み蹴つてアデリアさんが跳んだ。

直後、ちらりとアタシの体がある方に目配せしたけれど、アデリアさんの視点からアタシは見えない。

だからいつたん意識を自分の体に戻して、周囲を確認してからまたアデリアさんと接続した。

（平気、アタシの方に敵は来てません）

『わかつたわ』

短い応答。

浮遊感に包まれたアデリアさんの体が、放物線を描くように空中を舞い、軽やかに近くの屋根へと着地する。

何条もの光を纏うアデリアさんのバトルスーツは、いついつの時、四肢の動きをサポートしてくれるスグレモノだ。

アタシは…うん。

一度着てみて、自分とアデリアさんのスタイルの差にショックを

受けて以来丁重にお断りしてますが何か。

『だめよ、ボウヤ。あせるなんてみつともないわ！』

楽しげに笑い、突つ込んできたクリーチャーに再度銃弾を浴びせるアデリアさん。

次々とフォーカスをシフトさせては即効で撃ち抜いて行く様子は、重なつての「ツチまでスカツ」とする。

あつは、喧嘩売る相手を考えろつてんだ！

『J達は？』

（平氣です）

むしろ失敗するつて状況が考えられませんよアデリアさん、ライサはともかくJだけは。

そう思つて小さく溜息をつき、アデリアさんから意識を離す。

そして体に戻つてスイツチを切り替え、アタシは一人の確認に回る事にした。

ライサの方は順調だった。

普段の甘々を見ると兵器らしさなんてどこにも無いが、やつぱり場に出ると雰囲気が違つ。

ふわ、と柔らかく後ろに下がつたライサの前方に展開されるのは、回転を繰り返す巨大な金属のリング。

ガシヤガシヤツ、と硬質な音を立てて、リングから突き出した銃口が一斉にクリーチャーを照準に捉えた。

『目標、確認しました』

そう表情もなく、無機質な声で言つライサの両目は、彼女が保有するバトルプログラムの起動を示すディープグリーン。

普段の淡桃に近い色と違つて、その眼球の表面には幾つもの数字やラインが映つている。

アタシはライサには重なれなかつたけど、その変化はミラーシュイドのズーム機能のおかげで良く見えた。

『迎撃します』

スカートを両手で摘み、片足を引いたライサが優雅な礼を見せた瞬間、何本ものレーザーがクリーチャー達へと襲い掛かった。

蜂の巣と呼ぶに相応しいダメージを食らったクリーチャー達が、断末魔の絶叫を上げながら蒸発して行く。

それを冷たいまなざしで見届けたライサが、すっと片手を上に上げる

直後にリングだったものがザラリと形を変え、彼女の手の上に巨大な砲台を作り上げた。

無骨な直方体のフォルムを持つ砲台の周囲で、輝きうねり出す無数の雷光

『フェイズ2、カウント・ダウン。5、4、3、2…』

あ、クリーチャー終わつたな。見る間でもなくそう思つ。エネルギーの大小を正確に把握する事はできなくても、そこから生み出される砲撃がどれだけ爆発的な威力を秘めているかは想像に難くない。

『1』

ライサのカウントがゼロを告げた時

急いで反らした視野の端に、目もくらむような光が焼きついた。

一方、Jは。

ええまあ、予想はしてましたよ。してましたとも。  
でも、

「…ア、イツ、絶対器用な真似とか無理だよなあ

こめかみを押さえてつぶやくと、自然と苦笑が唇に浮かんだ。  
なにしろ一面、見事な更地になつていたワケでして。

ええ。来た時は建物があつたのに、今はなーんにもなくなつてる  
わけですよ。

せいぜい、瓦礫の砂利が誕生したぐらい。

「ま、見晴らしはいいけどさ」

「が手にしてるのは、いわゆるハルバードに似た武器だ。全長2メートル強、鉄色をした金属製で、長い柄の先に三日月型の斧と槍、小さな鎌と銃口がついている。

斬つて良し殴つて良し刺して良し、さらに撃つて良しのスグレモノ。

それを振り回す」の周辺は、身を隠す場所もないほどの平面になつていて。

「どれだけ彼が暴れまわったか、それだけでも一目瞭然だった。

「戦つていると、クリーチャーで遊んでいるようにしか見え無い」の足元辺りに、ゆらりと陽炎じみた搖らぎが生じる。

それを認め、アタシは急いで声を荒げた。

「ライサ！ アデリアさん！ 出ました！」

『近い！？』

『かなり！』

「ここです！」と口頭で説明するより早いとばかり、今見たばかりの景色を一人に転送する。

途端に、物凄い反応速度で一人がその場所から離れて行つた。

おつし、アタシちゃんとオペレーターやれてるな。

なんて自画自賛しつつ、アタシも少しだけ後ろに下がる。

ずるり…と。

陽炎が見えたその場所から、巨大な何かが這い出よつとしていた。

『マザー…』

母と言つ意を持つ、ナイダスの生みの親。

どう言つ理由で「コレが来るのかは知らないけれど、コレが来たらその土地はもうダメなんだそうだ。

こんなにも文明が発達した場所でも、どうにもならない事つてあるらしい。

そう思つと、ずきん、と胸が痛んだ。

「……」

家からも出ず、ましてや生まれ故郷から離れた事も無かつたアタシには、住み慣れた場所を離れるつて考えるだけで怖い。

けど、そんなアタシの感傷をよそに、Jの方は逆に殺る気がチャージされたみたいだつた。

不適に笑いながら、地から這い出して来るマザーを腕組みしながら眺めている。

その目の前でマザーの異様に膨れた腕が現れ、牙だらけの饅頭みたいな顔が現れ、続いて胴体が現れ

Jを見下ろす巨大な顔の中心に「オ…と光が集まり始めた辺りで、よつやくJが動いた。

武器を構え、一直線に駆け込んで行く。

直後、カツ！とマザーの顔面から光が爆ぜた。

マザーの撃ち出した光条が、地を削り飛ばしながらJに掛けて突き進む。

その瞬間、不意にJが笑つた気がした。

構えていたハルバードを袈裟懸けに振るい、その一閃で光条を裂く。

かと思えば一本に割れた光の合間に体を滑り込ませ、マザーとの距離を一気に詰めた。

『ぐたばれ！』

吠えたJが武器を腰横に構え、一気に繰り出してマザーの頭部へと先を突き刺す。

そしてその柄を軸にして両脚を振り上げ、曲芸のよじこマザーの頭上へと踏み上がつた。

「グルアアアアッ！」

耳障りな声を上げながら暴れるマザーの頭上で、Jが両手を高くと上げる

その上に大きく広がつた立体魔方陣が、無数の模様を空中に躍ら

せ  
た。

「黒事？」  
セーラーちやん

「あ、はい。アーテリアさん達もご無事で」

倒されたマザーを見ながら、そう感じてミリーライドを外す。それから見た世界はやつぱり綺麗な青い海を臨む湾岸の町で、そちらじゅうに散らばるクリーチャーの死体が不似合いなほどに美しかった。

……いや、一部残骸のみれになつてゐるにと

「この「ロボ相手のアラジン」が必死だ

「その方が目立つからじゃない？」  
「ナイタフを消せるのは」しかし  
「ないんだし」

ショーナーがなにわゆる「ハドトリ」の言葉通りであります。

カツバタハを塞付るのはタジマヘンハにかにかそシカ  
一ノ三九一、バ表一ノ三九二、カツバタハを塞付

上に絡み付いている。

ヤードの肉片の形が斐つて立つた。

具体的にどう表わすたとも言え  
とのみぢ原形留めてしないんで  
なかつたけれど。

七  
七  
七  
七

ふわっと飛び込んで来たライサを受け止め、ぽんぽんと背中をなでてやる。

その、羽のように軽く思える体重は、本当に人形さんのようだ  
った。

それまでの破壊兵器のしさば、もう地球上にも残つていない。

「せいに、ライサがんばったあ？」  
桃色の澄んだ瞳が、愛らしい顔に表情を添えているだけだ。

「せいこ、ライサがんばつたあ？」

「うんうん、偉いね。ライサ」

と、やわらかな金髪を撫でてあげながら、とにかくライサを褒めまくる。

その手の下で、えへへ、と恥ずかしそうに笑うライサが本当にかわいくて、一人っ子だったアタシはまた、その様子に胸をときめかせた。

うわー、やっぱり可愛いっ！

よーし、妹ゲット。

そんな事をしているうちに、いつの間にか帰つて来てたんだろう。気付けば、ノガアデリアさんと話し込んでた。

「……」

あれ？

「……」

あれれ？

珍しくノガが真面目な顔してる？

そんな違和感に、ライサを抱えたまま近付いて行くアタシ。それに先に気付いてくれたのは、アデリアさんの方だった。「何がありました？」

「そうね…」

と、そこまで話しかけたアデリアさんがチラリとノガを見る。その秘密めいたやり取りに、ふと、胸の中がもやつとした。「あ、アタシに言えない事だつたら、いいですよ言わなくとも！」ここで「聞かせて下さい！」と言えない自分にウンザリしながらも、あわててアタシは両手を振る。

だつてアタシはこの世界にしたら珍入者で、ノガみたいに生まれながらにしてゲルナームについて知ってるわけでもない。

なのに…深く突っ込んで聞けるワケないじゃない。

そんなこんなで黙つてしまつたアタシに、何を思ったかノガがフローを入れてくれた。

「アデリア」

「なに？」

「何か、セーラーが腹減らしてるようなんだが」

「ぶちん。

「それで落ち込んでるんじゃねえ！　このバカ！　おバカっ！」

「バカバカバカ！」と吠えるアタシに、一ノが目を丸くする。

あ、本気でわかつてないって顔してやんの。この野郎。

「…ああ、もうっ！」

いかんいかん、これじゃーのアリカシーがなさすぎる。アタシの理想にこんな欠点はねえぞ。

やはりここは改めてアタシの理想を教え直すべきか！なんて真剣に考えていたら、今度は本当に答えをくれた。

「まあ、メシは後で食いに行くとして。せつめのマザーはF-1だ

…グランプリ？

何のこいつぢやと首を傾げるアタシに、アテリアさんが説明をくれる。

「第一世代。つまり別のマザーの子供みたいなものね。本体がまた別にあるって事」

あ、そう言ひ事ですね。理解理解。

そう納得して一ノを見上げると「こんな事もわからんのか」みたいな顔してた。

ぬあああ、いちいち腹の立つ！

「」

「何だ」

「今度、女心に関するマガジンも読んだ方がいいと思つよ  
マジで。」  
そう言ひながらライサを降ろし、一ノに指をつきつけて顎をしゃくる。

その途端、アデリアさんがふと何かを差し出してきた。

小さなバッジ…みたいな金属塊。

広げられた翼のトライバル模様が彫り込まれたそれは、エンブレムに見えなくもない。

「何ですか、これ？」

「マザーから出て来たの。ミーティアムを養成する学院のものよ。私が卒業した場所なんだけど……」

と、そこまで言つて黙つたアデリアさんに、思わずバッジを握り締めて続きを待つ。

そんなアタシに、アデリアさんがクスリと妖艶に笑つた。

「セーラちゃん、一つ頼み事して良いかしら?」

「あ、はい」

「私、あの学院で顔が知られちゃつてるから、セーラちゃんに行つて欲しいのよね」

「はい」

ただのお使いでしたら喜んで。

「スパイとして行つて欲しいの」

「はい?」

声が裏返つた。

ちょ、ちょっと待つて。

ただでさえ友人作るの苦手なアタシに、いわゆる諜報活動をやれど?

スパイってあれでしょ、人から情報聞き出したりする奴でしょ。ムリムリムリ絶対ムリっ! と繰り返し、アタシはあわてて身を乗り出した。

「あの、アタシ自信ないです。こここの技術にも不慣れだし、何かあつても切り抜けられる自信ないし。その、こここの常識だつて知らないし勉強もしてないんで」

「大丈夫よ、ちゃんとフォローはつけるから。ね?」

……。

アタシとアデリアさん、そしてライサの視線が「に向く。途端、「がふつと小さく溜息をついた。  
ええ、ばつちり目撃しましたよ。

同時に肩までくめてくれちゃったのを！

「ちょっと！ 何その『しじうがねえな』みたいなリアクション」

「そう見えたか？」

「見えたよ！」

「じゃあ、それで正解だ」

こんの大邪鬼……つ。

「アンタがアタシの理想形だなんて、絶対何かの間違いだと思つ……」

アタシは認めんぞ、認めるもんか認めませんよ。

なんて内心でギリギリ歯噛みするアタシをよそに、数日後にはち  
やつかり入学の手続きが済ませられていた。

「…ん、よし」

一仕事終わって帰った後、アタシはここに来て初めて料理をした。帰り際に入学話を聞いて仰天したけれど、手続き済んじゃったものは仕方ない。

ちなみに調理はモチロン、アデリアさんに聞きながらだ。前世で包丁も持たせてくれなかつたせいで、手付きは幾分ぎこちなかつたけれど、それなりに頑張つた…と思つ。

「セー」「ちゃん、終わつた？」

「あ、はい」

作つたのは、簡単なスープとミートパイ。

味の調え方を教わりながら、初めて作る料理は思いのほか楽しかつた。

アデリアさんとアタシが作つた物の差は…まあ、考へないよつてしまふ。

とりあえず形になつたので良しとする。

「」、「ライサ？ 出来たわよ」

「ああ」

「はあい」

アデリアさんの呼び声に応じて、それぞれ自分の席に着く面々。アタシの隣にアデリアさん、真向かいに「」、そして斜め向かいにライサ。

そんな圧倒的に女率の高い「」で、やつぱり「」だけが浮いていた。

「これ、料理か？」

席につくや否やアタシの料理を指して尋ねる「」。

失礼な。

反射的にむすてくれたアタシの代わり、「」に答えてくれたのはアデリアさん。

「セー！」ちゃんが頑張ったのよ。本当よ  
「ああ、穏やかな声が耳に優しい。

アデリアさんいい人だ、と感激しながら自分の作った方を口に含み

「……う」

自分で言うのも何だが固まつた。

うん、まあ食べられる味だ。

破壊的に不味くはない。

けど、明らかに一味どころか十味ぐらい足りない気がする！  
アデリアさんの料理で舌が肥えすぎたのに加え、アタシの料理の  
下手さが微妙な加減にフュージョンして、何というかとても残念な  
一口目だった。

「せいこつ」

「……うん？」

「おいしーよ？」これ

頬張ったパイをむくむく噛み締めながら、やつひつてくれたのは  
ライサ。

ああ、何ていい子！

アンタはアタシの女神だ！と拳を握り締めていたら、隣で同じよう  
に料理を口にしたのがぽつりと呟いた。

「……皿」

「はい？」

「でしょ？」

「ああ」

「え、え？」

アデリアさんとこの間でもくべくと取り交わされた会話に、アタ  
シの方が目を丸くする。  
何だそれは社交辞令か。

新手の嫌味か。

そう怪訝な目を向けていたら、アデリアさんがそつと耳元で囁い

てくれた。

「大丈夫、Ｊは嘘言つてないわよ」

「味音痴！？」

さてはアタシの望み方が悪かったのか！と悶々とするアタシの皿の前で、皿を空にして行くＪ。

いや、嬉しいんだけど間違つても味覚音痴レベル上げないでね、と内心本気で心配してしまつた。だつてどこか美味しい物食べに行つた時、その喜びが伝わらなかつたら嫌じやない。

「これ、微妙な味ですね」

「そうね。でも、Ｊはゲシュペンストだから」

その一言で説明を片付けてしまつアデリアさん。

すいません ワケがわかりません。

食事が終つた後、Ｊはどこかに出かけて行つた。

ライサは部屋でビーズ編み。

アデリアさんはリビングでティータイム。

そしてアタシは自室、もといアデリアさんにもらった部屋に入り、ぱたん、と後ろ手に扉を閉じた。

まず、覚えた事を整理しておこう。そう思つたからだ。

「…変なの」

今まで怒鳴りつけて来る奴ばっかで、こんな空間はどこにもなかつた。

怒鳴らない奴は遠巻きに、気持ち悪いぐらい優しさを強調して来てた。

あなたのためとか言つて、単に自分が上に立ちたいだけじゃない

か。

「どうせ大人なんてそんなもんだ、ヒアタシも斜に構えていた。

「死んでも良かつたんだけど… なあ」

何でだろう、今ではそんな気がしない。

これが夢なら醒めて欲しくないし、もうじまじま、この流れに身を任せいてもいい気がする。

なんて、色々とまともられない頭で考えてみたけれど、はつきりした答えなんて出るわけない。

だからアタシはベッドに仰向けに寝転がって、枕元の本を手に取つた。

青い背表紙の本。

この世界では青を最下位として、虹の色を辿つて赤が一番上のランクになるのだと言つ。

要するにアタシが手にしているのは、アタシの世界で言えば幼稚園児が手にするようなレベルの本なんだけど、アタシにはそれで充分だった。

「過去より、現在へ…」

ルームライトを背表紙に受ける本を開く。

そして何度も読み返した一節を言葉でなぞり、アタシは最終確認へと入つた。

「ゲシュペNST。ナイダスを消せる者。ファウンテンヘッドが精神活動している時だけ行動できる」

身近なゲシュペNSTは、」だ。

実際に仕事でナイダスを消す所は何度も見ているし、これに関しては聞かれても間違えないで済む気がする。

次。

「ファウンテンヘッド。異世界から時折、ゲルナームに訪れる者。ゲシュペNST発生の引き金」

これがアタシ。

略称でヘッドと呼ばれる事もあるらしいのは、アデリアさん

から聞いた話だ。

そこまで読んでページをめくる。

「ミーディアム。発生したゲシュペ็นストを探知し、固定する技術を持つ者」

これがアテリアさん。

そして、これからアタシが行くのが、そのミーディアムを育てる場所つて事。

「……」

そこから後ろのページは、世界の状況についてだった。

「ゲルナーム。正しく歪んだ世界。崩壊予定、あるいは崩壊した各文明の特徴保存を目的としたコロニーを持つ。生活空間はこのコロニーを利用して行うのが一般的」

「……」

これは、アタシのいた文明が将来的に滅びるって事なんだろうか。まあ、滅びかねないぐらい危なつかしい文明だつてのは認めますけどね。

とりあえず、ゲルナームにはコロニーがいくつある事、それらの文明の大半が異世界のものをモーテルとしている事。

時々そこにナイダスができ、それができたら逃げなきゃならん事。さらに、それを消せるのがゲシュペ็นストだけである事。以上の事と、アタシ＝ファウンテンヘッド＆コ＝ゲシュペ็นストの関係が理解できれば、世界の認識としては及第点らしい。

「ん、よし」

青い本を床に放り投げ、もそりと寝返りを打つて枕に突つ伏す。

これだけ覚えておけば、学校で「暁つてどうして明るいんですか」レベルの阿呆な質問するような真似はしないだろう。

結構バカでもないじゃんアタシと思う反面、まだアタシの中で「行きたく無い病」がぐるぐると渦巻いている。

また冷たい目で見られたら。

また、会話から取り残されたら

「……やめよ」

「」はアタシのいた世界じゃない、異世界だ。

前の事を考えるのなんてやめよ」と何度も自分に言い聞かせて、

アタシは強引に扉を閉じた。

ゲルナームにきてから、ずっと忘れていた出来事。

そんなもの、今になつて思い出したつてしようがないのに

「……最低だ」

振り払おうとすればするだけ、当時の光景が蘇る。  
あの日、気がついたらクラス中が静まり返つてた。  
ボロボロになつた教科書が、割れた窓から入り込む風に吹かれて

た。

欠けたガラスを照らす光。転げた椅子。倒れた机。  
空気は冷たく冴えていて、彩度がゼロになつたような錯覚すら感じさせる。

そんな広い教室にたつた三人、バカみたいに座つて向き合つてた。

原因は……アタシだつた。

「こう言う事は、あまり言いたくないんですけど

そう切り出す教師の声が耳に障る。

殴られた頬が痛い、口の中も苦い。

アタシ悪くない、なんて言つてもムダなのはわかつてゐる。  
いつだつて、強いのはレッテルを貼る側だ。

：もういいよ。

アタシが全部悪い、そうすれば綺麗に解決するんだろ。  
説明する氣だつて残らず失せたよ。

そんな無氣力なアタシを、何度も何度も会話だけが通り過ぎて行つて

つて

アタシは、ここにはいられないと思つた。

それから学校に行かなくなつた。

時々、ジュンだけが遊びに来てくれた。

みんな壊れ物を扱うみたいにアタシを扱つたから、ジュンが来る事にも文句は言われなかつた。

たまに身内が泣いたり怒つたりしたけれど、その中にアタシの欲しい答えはなくて。

そのまま一ヶ月が過ぎ、半年が過ぎ、一年が過ぎて行つた。

「セイ」

アタシの部屋で、メイク直しながらジュンが口を尖らせる。「もつたいないなあ、セイ。かわいいのに飾らないんだもん」

「いらねーよ、そんな評価…」

ジュンを振り返りもせずに、溜息混じりにそう返す。

かわいいとか大きなお世話だよ。

そんな風に答えていたら、ジュンが例の話を持ち出して来てそして、アタシはゲルナームに来る事になつた。

「……」

暗い気分で目を開く。

とつぱりと暮れた窓の外、見えるのは仄々とした夜景、と

…「ンコン?」

「ひつ…!?

途端に見えたものに息を飲んで、アタシは思わずベッドから飛び起きた。

「アテリアをああん!」

部屋から廊下に飛び出し、リビングに飛び込んでアテリアさんを呼ぶ。

その声に振り返つてくれたアテリアさん、「アタシは涙目で訴えた。

「…」の奴に、扉から入れつて、言つて、下を…

そう。窓の外に見えたのは…

来るなら廊下から来てくれと言いたい。

壁に立つ事もできるしにとつては、階段も壁も似たようなものなんだらうけど、アタシはそんな奇抜なご対面に慣れちゃいないんです。

「つるせえな

「誰のせいだ！」

と、リビングに入つて来たしに開口一番で文句を叫ぶ。

」の奴、どこかで遊んで来たんだろう。

彼愛用のハルバード、もとい普段はブレスレットやアンクレットの形でその体を飾つている武器が、妙な感じにすすけていた。

「そこまで驚く事か？」

なんてアタシをあしらいつつ、涼しげな顔でソファに寝転ぶ。

それを見た次の瞬間には、アタシの片手が近くのクッショーンを引つ掴んでた。

「フツー驚くわッ！」

無視すんなオイ！と、ちに背中向けてるしの後頭部めがけて全

力投球。

途端に振り返りもせず、しがひょいと上げた片手でクッショーンを止めた。

かと思えば、手首のスナップだけで投げ返して来る始末。

当然のようすにアタシもそれを投げ返す。

こうして」との間でさりげなくキャッチボールが成立したが、頭に血が昇つてるアタシはそれどころじゃない。

「だいたい、何の為に玄関があるとつ……！」

「構造上」

「そうじやねえっ！」

アタシの世界の住民は、窓から様子を見に来たりしません！

その事を、ひたすらしに訴えて、説明して。

やがて色々と疲れたアタシがふて寝するまで、それほど時間は要らなかつた。

「…あの、バカ」

知らん。もう知らん。

あそこまでデリカシーない奴なんて最低だ。

「アホバカタコ…クソ野郎、つ……」

電気消した部屋で枕に突つ伏し、毛布を被つてうだうだと愚痴る。だいたい、アタシを知らない人が多すぎるんだ。

いや…知られてないから気楽なのか。

過去なんて切り離せない、でも元凶から離れる事はできる。こっち来て良かつた……かな。

でも、あれはない…よ、ね……

ぼやく端から、次々とバラけて行く現実感。

眠気が、徐々にアタシの思考を麻痺させて行つて

「…」

ふ…と。

不意に、遠くから誰かの聞こえた気がした。

高低二つ。

男と女。

「…あんまり怒らせちゃダメよ」

そんな、たしなめるような女の声。

夢現の境、誰のものかもわからないけれど

「…本当に嫌われちゃうわよ？」

そう諫める声に、男の声が重なった。

「俺を誰だと思ってるんだ」

不遜にて傲慢、身勝手を地で行くような聲音。

ふざけんなよ、と言おうとしたけれども声が出ない。

ああ、そうか。

…眠いんだ、アタシ。

「知ったソラで同情したって落ち込むだけだろ。それなら怒らせた方が、まだ…」

「そこから声が遠くなる。

…聞こえる言葉が曖昧になる。

「…、だろ？」

「…呆れるわ、貴方らしくて」

「くく、言つてろ」

上等だ、と。

最後に聞こえた男の声は、何かに挑みかかるような実に頼もしい

声だった。

…だけえ。

学院ウイグリード入口 もといアタシを見下ろす門を前に、思わずそんな感想が漏れる。

そこはまさに城門だった。

むしろ、校舎がそのまんま城にしか見えなかつた。さすが異世界。重々しい金属製の装飾門の左右に、どつしりと伏せている石の獅子像。

同じく石組みされた壁には薦が這い、建物の歳月を感じさせてくれる。

安っぽい城のアトラクションなら行つた事があるけれど、この建物から感じる威圧感はそんなのとは違う

まさにバケモノと関わる連中を育てる場所なんだと、はつきりわかる雰囲気だつた。

門を潜つて大きなエントランスに入れば、その突き当りが理事長室。

教室に行くには、その左右壁際にある階段を上がつて二階に行き、通路を歩いて行けばいいんだと、ノガアデリアさんのメモ片手に説明してくれてた。

…多分。

「大丈夫か？ セーハ」

「ぜ、全然大丈夫だと思つ…」

もう、自分でも何言つてるかわからんけどね！  
あああ帰りたい、と早くも気持ちが全力で後ろ向き。  
レベル1で魔王城に辿りついたやつた勇者の気分だ。

「なら、前見て歩こうぜ」

「見てるつて！」

ちょっと視線をまよつてますけど…

「Ｊ、アンタの団太さが恨めしいよ…」

「そりゃ、お前の願望だつたからな」

なんてさりとて言つてくれたＪに、やつぱり願う方向間違えたと思う。

そんなこんなで場に圧倒され、行き交う生徒の好奇の視線にさらされつつ、アタシは理事長室へと足を踏み入れた。

入つてまず目に付くのが、大きな窓と、それを背にして置かれた机。ダークブラウンの重厚な机は綺麗に磨き抜かれ、そこに置かれた小物すらくつきりと映している。

少し視線をずらせば、窓横に束ねられた赤いカーテンが、天上付近で緩くドレープの弧を描いていた。

それを見上げるアタシの、制服の左胸で光っているのはバッジもといエンブレム。

青 最下級を示す位の色だ。

まあ、当然なんだけど。

「Ｊ、コレ何？」

「全体図だろ」

理事長室内、角にちょこんと置かれたオブジH。

それによれば、この城のような校舎を中心として、四つの棟があるようだつた。

1・思い切りメタリックな外見の棟、REGULUS。獅子棟。主に銃機や機械の研究・製造に関わる場所。

2・いくつもの歯車が噛み合つた棟、VOLUTE。螺旋棟。俗に言う鍊金術に関係する場所。

3・ぱつと見た感じ巨大な樹にも見える棟、SERPENT。竜

蛇棟。

アタシの世界で言う所の幻獣とか生物に関わる場所。

4・なぜか半透明で描かれている棟、IRIS。靈素棟。

これだけ、ある者にとつてはあり、無い者にとつては無いつて言う妙な説明がついていた。

「三角錐…？」

位置関係としては、本校を中心とした三角形の頂点に獅子・螺旋・竜蛇が置かれ、靈素が本校と重なるように上下に伸びている。

と言つた、つらうと靈んだ靈素棟は見よつによつては上あるようにも、下にあるようにも見える不思議なものだつた。オブジヨなのに。

「待たせたね」

「はいっ！」

と聞こえた声に急いで振り返り、慌てて頭を下げる。  
そこに、いつの間に来たのか理事長さんがいた。

漆黒のインバネス・コートに黒ズボンと白シャツ。ちよつと髭を生やした栗色目の人だ。

オールバックの白髪がまた、服にやたらと良く似合つ。彼が首から下げるところがエングレムでなく十字架だつたら、どこの神父さんかと思つただろう。姿勢も良いし、細身だし。

や、アタシの世界の神父さんは、腰に剣と銃なんて装備してませんけど。

「今日、転入手続きをする晴子と言つのは君かね？」

「あ、はい。アタシはアテリアさんの推薦で

そう言つた瞬間、空気が凍つた。

何だ、このピシッと引き締まりました的な雰囲気は。

「…あの」

何か変な事言つましたかアタシ。

と、おそるおそるオッサンもとい理事長さんの顔色を伺つと、急に理事長さんの声が裏返つた。

「あ、ああアテリア猊下！？」

「…へ？」

今何か、すんごい敬称を聞きましたが。

「すいません、もう一度」

ワンモアブリーズ？

「枢機卿。アデリア猊下の「」推薦ですよね！？」  
「…あ、はい」

勢い込む理事長さんのテンションに、圧倒されて生返事になるアタシ。

だつて何かめっちゃ感動されてるんですけど、どうすりゃいいんでしようかこの状況。

むしろ理事長さん、顔近い近い。

と、今までの緊張が一気に消し飛んだ分、やたら落ち着いてしまつた気分を味わいつつ、アタシはひたすら感動する理事長さんをながめてた。

「セーロ、アデリアから何も聞いてないのか？」

そう怪訝そうに尋ねて来る」をぐるりと振り返つて、うん、とうなずいてみせる。

「聞いてねえ」

確かに、素性も知らん奴の転入をゴリ押しできちやうんだから、それなりにコネはあるんだろーなぐらいには思つてたけど。

でも今は、そんな事よりアデリアさんから預かつた転入届を渡す方が先だった。

「つまり、転入OKって事ですか？」

「ええ、猊下の「」推薦とあれば断る理由も「」ぞいません！」

なんて、ラブレターもらつちゃつた男の子みたいに転入届を読みふける理事長さんに、ほつと内心で息をつく。

とりあえず受理はしてもらえるみたいですね。

うん、良かつた良かつた。

「時に猊下はお元気でしょうか、私が候補生であつた頃はそれはそれは皆のあこがれでした」

そこから先は、理事長さんのあまりの熱弁ぶりのせいか良く覚えていない。

ただ、アデリアさんがここで物凄い尊敬されてたマドンナ的存在だつた事、ある日突然姿を消した事なんかが断片的に判つたのみ。

そんな話よりも、アタシは重大な事を発見してしまった。  
なにしろ、理事長さんはどう見てもいい年こいたオッサン。  
その理事長さんが「若い頃」に憧れたって事は  
「…マジですか」

アテリアさん、あなた一体何歳なんですか。

理事長室で気が抜けたおかげで、校内を歩くアタシの足取りは軽かつた。

エントランスの階段を昇り、扉を消して廊下に入る。

そう、開くんじゃなくて消えるんですよ扉。

理事長室以外は、

扉にも広げられた両翼を模したエンブレムが扉にあつて、開けようと思うと勝手に消える。

最初、知らずに押し開けようとしたアタシはバカだつた。

こう、見慣れない物にそつと前足を出しかけた猫みたいな姿勢で固まりましたとも！

…恥ずかしい。

「……わあ」

それでも口を開けば、わあ、だの、おお、だのありふれた反応ばかりがこぼれ出す。

それぐらい、アタシは思い切り異邦人してた。

アタシを置いてさつさと帰つた」への文句も、この光景の前では消えてしまう。

床に敷かれているのは刺繡入りのラグ。柱は所々に彫刻をほどこされた艶消し仕様。

そして壁際では、生徒が何人も談笑している。

服にある程度バリエーションがある所を見ると、これが校風なんだろう。

いわゆる制服を着ている生徒もいれば、私服にエンブレムと書つ生徒もいた。

…ほとんどが青だつたけど。

「あなた、転入生？」

「は、はいっ！」

ビビった！

反射的に振り返ったアタシの目についた人。

それは、どこか冷たい雰囲気を持つグリーンカラーの女生徒だった。

ロングの黒髪に暗い灰色の瞳、気の強さを感じさせる態度と口調。そして燐然と階級を主張しているエンブレムが目にもまぶしい。

風紀委員とかやつてそうなタイプだよなあ、と咄嗟に思う。

視線を反らすべく見る先を下に落とすと、すらりとした脚線美が制服のプリーツスカートに映えていた。

「この時期に珍しいわね。案内書は読んだ？」

「…いえ、まだ」

「」の説明もすっぽぬけるぐらい緊張してましたので！と内心で毒づく。

嫌だなあ、来て早々トラブルにならないといいんだけど。

そんな思いをそつと噛み締めて、アタシは彼女と向き合つた。

「今日が初日？」

そう遠慮なくたずねて来るグリーンカラーの彼女が、ちらりとアタシのエンブレムを見る。

はい、見ての通り最弱生徒です。

思わず逃げ出したくなる気持ちをぐつと堪えて、無言でこくりとうなずいてみせる。

だいたい、アタシ何かやらかしたっけ、と色々考えてはみるもの、扉の前で片手上げたまま硬直してたり、同じ場所で三回ぐらい道に迷つたり、」への文句を一人で呴いてたりした事しか思い至らない。

うん…怪しまれて当然でした。アタシ何て不審人物。まことに、詮索されそうになつたら全力で逃げよう。

そう決意を固めていると、彼女が不意に口を開いた。

「案内するわ。後、聞きたい事あつたら聞いて頂戴」

「うわー、なんか一方的。

その態度に内心ムカツキつつも、やっぱり彼女の持つ武器に目が行くアタシ。

「何か？」

「いえ、別に」

「撃たれたら痛いよな、やつぱり。

」みたに穴空いても平氣な体だつたらなあ、と今更思つても後の祭り。

「案内…お願いします」

変に恨みを買つても嫌だもの、好きで」に理想持つてかれたワケじゃないし。

そんな言い訳を自分で並べながら、アタシは彼女の案内を受ける事にした。

名乗りによると彼女はツアーラ。

カラーはオリーブ。

「グリーンじゃないんですか？」

「オリーブは俗称

さいですか。

「……」

いかん、氣まずい。

この沈黙が氣まずい！

カツカツと高い足音を立てて前を歩くツアーラは、俗に言つお嬢様を連想させる。

だからアタシは、侍女にでもされた氣分でその背中を追いかけていた。

「「」の先が更衣室」

「はい」

「「」が食堂」

「はい」

「「」を真っ直ぐ行くと講堂」

「はい」

何だか、自動応答機と化してませんかアタシ。

「後、聞きたい事ある?」

「あの」

「ツアーラ、それ新人か?」

質問しかけたアタシの声を遮つて、不意に割り込んだ声。  
それを聞くや否や、アタシのテンションが下がつて行つた。  
確かに青ですけど、思い切り馬鹿にした口調で言わないで下さい  
よ。

そう喉から出かかつた言葉を飲み込み、声の主をジト目で睨む。  
ツアーラとアタシを眺めているのは、やや黄色がかつたエンブレ  
ムの生徒。

うつすらと縁が残つているといふを見ると、多分、ツアーラより  
少し上なんだろう。

浅く日に焼けたような色の肌と、良く締まつた筋肉は格闘に慣れ  
た男特有のものだし、ベリーショートの赤い髪や、金に近い琥珀色  
の瞳は獸にも似る。

ちなみに、顔立ちは悪くない。

…その分、性格は悪そうだつたけど。

「お前、コレにわざわざ案内してやつてるの?」

そう一ヤ一ヤ笑いながら言つたつて、アタシが文句言つよつ早

く、

「はい。それが何か?」

カツ、と足音高く彼に詰め寄つたツアーラが、冷たい一言を叩き  
つけた。

「用があるから声をかけたんですね?」用件は?」

「あ、いや…」

「無いのでしたら退いて下さい。案内の邪魔です」

そうピシヤリと言い放った彼女に、気圧された男子生徒が横にそれる。

その気勢に内心で拍手を送つていると、ツアーラの視線がアタシに向いた。

「行くわよ、転入生」

「あの、晴子です」

思わず訂正したアタシに、歩き出さうとしたツアーラの足が止まる。

やべ、もしかして怒らせた?

そんな懸念で固まつたアタシの耳に、彼女の声が突き刺さつた。

「晴子」

「はいっ!」

生意気言つてすみませんでした!と謝りつとしたアタシの視野に入つたのは、

「ほら、行くわよ」

さらりと黒髪をなびかせて振り返る、ツアーラの控えめな笑顔でした。

ツアーラは無愛想でも、悪い人じやなもそつだつた。

常に突き放すよつな口調で話すわりに、質問にはきちんと答えてくれる。

そんなこんなで、一通りの案内を受けたアタシが連れられて来られたのは中庭。

そう、まさに城の庭園！つて感じの広々とした空間がそこにありましたよ。

「うわー」

いいセンスだ、と目を見張る。

整えられた下草の縁と調和する、彫刻つきの三段噴水。

蔓草を絡めたトレリスに寄り添う、すりついたスタイルのテー  
ブルセツト。

少し視線をずらせば、壁に据え付けられた獅子顔の石像の口から、細い滝が流れている様子までもが見て取れる。

そんな感じで見た中世しているのに、ちやつかり自販機があつたりする辺りがこの世界らしい。

最も飾り箱的な見た目のせいで、言われなければ何だか判らなかつたと思うけど。

そこでアタシが一個買い、続けてツアーラも一個買つ。

そうして二つ分の精算を済ませ、アタシ達は壁際のベンチに腰掛けた。

「もう質問はない？」

「ええ、まあ」

何となくわかったので。

と、ジユースにストローを刺しながら頭を整理する。

まず、靈素棟の名前にもなつてゐるIRIS、つまり空の虹は見る人によつて五色に見えたり七色に見えたりする事から、定まらな

いもの、感性の代名詞にもなっている。  
そして虹の一番上は赤。

これが枢機卿のシンボルカラーであるカーディナルと言つ意味と重なつて、高位=赤と言つ國式になつてゐるんだそうだ。

で、青は見習いもとい候補生。

ちなみに一括りで青と呼ばれる色は、実は紫や藍も含むと言ひつ。アタシの青は紫寄りだ。

何で青とその他で分けられているのかと聞いたら、縁以上になつてようやく、正式なミーティアムとしてナイダスに関われるからだと教えてくれた。

残りの質問は後で聞くとして。

「やっぱり、青が飛び抜けて下なんですね」

「そうね、そこから上るのが一番大変よ

「…そつすか」

つまり青「才か…」。

何だかなあ、とストロー噛みつつ肩を落とす。

そんなアタシ達の頭上から、午後にふさわしい穏やかな木漏れ日が降り注いで來ていた。

ちなみに買ったのはヨーグルト風味のフルーツジュース。

知らない果物名ばかりなのがちょっとブキミ。

「未熟の青、か…」

ツアーラは、細身だけど特に弱さを感じない。

それなりに場数も踏んでるんだろうなと、漠然と思わせるものも持つてゐる。

なだらかなボディラインに、切れ長の涼しげなまなざし。柔らかさを感じさせる肌色を纏つ、器用そうな指先がまた女性的。

「何か?」

「…いえ、別に」

何か?、差を感じると言つた微妙な気分なんですがどうしましょ。

大して年変わらないって言つたけど、ともじやないけど雰囲気が違う。

そんな一方的な劣等感を感じていると、不意に向こうの方で歓声が上がつた。

原因は、」だ。

アタシを迎えて来た所を、他の生徒に囲まれたらしい。

「珍しいわね、ゲシュペNSTだなんて、

「わかるんですか!?」

「ええ。ミーディアムの憧れだから」

」の方を見つつ、そう答えるツアーラの声に感動はない。

そのリアクションは、他の生徒の熱い盛り上がりに比べて、妙に素つ氣無いものだった。

あれ? と思つた。

おつかしいなあ、」だったら、もっとモテてもいいんだけど。

「ツアーラさん」

「ツアーラで」

「ツアーラ、もしかしてゲシュペNST嫌い?」

最後の一滴を飲み干してそう尋ねたアタシに、ツアーラが静かな笑みを浮かべる

…ゾシとした。

その笑みに、確かな殺意があつたから。

## スカイーズ

.....。

「ふふふふふふ。

「...セーロ、笑い方が不気味だぞ」

「え、そう? やだなあ、氣のせいじゃない?」

ふはははははは。

これがニヤけずにいられますか! と悪役笑いをかますアタシの後ろを、ロが首を傾げながら付いてくる。

少し前、無言で去ってしまったツアーラにショックを受けていたら、ロがアタシを誘つたのだ。

校内遊技場 力ジノつぽい息抜きの場所に。

賭け事いいの! ?と仰天したもんだが、ロいわく理事公認。

そういうや、アタシ! 」で政府とかの話を聞いた事がないなど、改めて思った。

ドライマラしきものはトボでやつてるけど、良く考えたらコース見てない。

「ロニー別に生活してるって事は、いちおつ法律ぐら! あるんだろうけど。

「...んー」

「セーロ、勝利の余韻に浸つてるのか?」

「考え方! 」

難しい顔で余韻に浸るとか、どんだけ器用な奴に見えるんだ。と、相変わらず「空氣読めない」に苦笑して、アタシは夕暮れ色に染まる校舎を校門に向かった。

アタシがロと参加したのは、生徒達の間で流行つてているスカイーズと言うボード・ゲーム。

オセロとチエスを足して2で割つたようなゲームで、まずオセロ

のように相手の石を挟んで色をひっくり返し、その色を土地に見立てた上で自分の駒を進めると言つものだつた。

その駒も色々だ。

例えば自分の色だけしか進めない兵士。  
自分の色・相手の色・自分の色となつている場所しか進めない騎士。

相手の色しか進めない暗殺者。

自分色と自分色の間なら相手色が何個あつても構わない魔術師。  
乗つっていた色がひっくり返されて変わると、今度は変わつた色の方しか進めなくなる道化師。

などなど、駒も名前に恥じない活躍をする。

まあ、何だかんだでボードゲーム系に自信があるアタシは、十人抜きと言つ快挙を達成してみせたのですよ。

その連戦ぶりに、時々行われていると言つ大会に、いつか出たらと言われるぐらい。

「意外だなあ、Ｊがゲーム弱かつたなんて」

「お前が強いからだ」

なんてさらつと負けを認めてくれちゃつたＪの言葉に、ますます機嫌を良くするアタシ。

そりやあダテにネット対戦で上り詰めてませんよーと胸を張つたあたりでふと気になつた。

「Ｊ、今なんて？」

「だから、セー「ゴが強いからだ」

「……」

「……ああ、そつか。

そう言う事か。  
納得した。

「そういや、アタシの願いだもんな。Ｊ……」

アタシが、ボードゲーム弱いなんてコンプレックス持つた事なかつたからか。

だから」、スクイーズ弱かつたんだ。

金がある奴だけが強くなれるゲームと違つて、古典的なゲームは運と技術次第でいくらでも強くなれる。

それが面白くて前の世界でハマつてたんだけど、そんなどうでもいいスキルを披露できる口が来るなんて思つてもいなかつた。

「…はは

なあんだ。

結構やるじやん、アタシ。

実際、三人抜きを達成した辺りから、アタシは注目の的だつたし。そんな感じですつとニヤけてる顔が珍しかつたんだらう、Ｊが何度もアタシの表情をチラ見してきてた。

「ねえ、Ｊ」

「何だ

「次のマガジン、アタシが買つてあげようか

そう笑つたアタシに、Ｊが少し戸惑つた顔をする。  
そりや そりや。

買つてあげよう、なんて思つた自分にアタシも驚いてる。

予期せず訪れちゃつた沈黙が気まずくて、何となく早足になるアタシ。

そのまま長く伸びた木々の影を何回か踏み越した辺りで、後ろのＪが不意に笑つた。

「…近エうちに雪でも降るのか？風邪引きそつだ」

「ミサイル降つても平氣じやん

天変地異でも死なないクセに。

「そうだな

「そうだよ

Ｊの再生能力は普通じゃない。

以前、倒れたビルの下敷きになつた時にはついに死んだかと思つたけど、数分後、メキメキとビルを力ち割つて出てきやがつた。

アンタは雨後のタケノコかと、あの時はちょっと押し込み直して

みたくなつたもんだ。

「いいから受け取つておきなつて。な？」

もしさタシが望んでいれば、こはここまでボロ負けしなかつたはず。

そう思つと黙つてもこりれなくて、思わずそんな事を口走つてた。

「一弔でいい？」

「マガジンはな

聞けば、他にもいるものがあるんだと云つ。

それにOKサインの親指を立ててみせて、アタシは小走りに校門から駆け出した。

「欲しいものって言うから、何かと思えば…」

武器だつたのか、と今頃になつて納得する。

Ｊがアタシを連れて入つたのは、いわゆる武器屋と言つて銃砲店。妙にスマートな武器商人が満面の笑顔でお出迎えしてくれる物騒な店だつた。

…どちらのホスト様ですか？

ガンスミスは、そう聞きたくなるぐらい穏やかな印象の人だつた。やや紫がかつた白銀の髪、甘く穏やかな顔立ちに緑の瞳。モノトーンのスラックスとカットシャツに、きつちりと合わせたベストとネクタイがやたら理知的。

Ｊの見たまんま暴力装置です！みたいな外見と並ぶと、余計にその穏やかさが際立つて見える。

そんな人がニコニコ笑いながら武器を薦めている図は、なかなかにシユールだつた。

「コレ全部、売り物なんだ…」

壁にずらりと並べられた、ナイフやライフル、それからハンドガン。

さらにショーケースに陳列されている物には爆弾も。

犯罪対策大丈夫？なんてヨソ者のアタシが心配になつてしまつぐらい、右を見ても武器左を見ても武器、とにかく武器が目に入らない場所がないくらい武器だらけだつた。

どことなく青光りして見える金属質な店内は、置いてある物が物だけに肌寒く感じる。

整然と並ぶ品物の無機質さが、飾り気の無い店内に不気味なほど似合つていた。

「もうちょっと、別のモノ買いに行くと思つてたよ  
「例えば？」

「服とか」

と、ズラリと壁や棚に並んだ武器の一通り視線を流してから「を見

る。

「……」

見事に上から下まで「ゴシック系」だった。

こんばんわ悪魔です、と言われても違和感ないレベルのモノトーンと銀。

「……」「ゴメン、買い物続けて」

聞いたアタシが悪うございました。

普段、アデリアさんやライサが普通に対応しているから慣れてたけど、このファッションはかなり特殊だ。

そこらの店に売ってるようなデザインでもないし、そもそも体格に合つのが少なそうに思える。

まあ、似合つのは認めよう。スタイル良いし。ワイルドだし。でもやっぱり派手だし目立つし、何よりナルシストっぽいのが色々と痛い！

やつぱ、じつはつのは映画向きだよなあ……とか言つていたら、くるりと「」が振り返った。

そして一言。

「誰の願望だつたと思つてるんだ」

「……」

「……」

アタシの願望でしたね。

穴があつたら入らせてくれ。

それでも、ガンスミスと語り合つてしまになつていた。

弾を込め、スライドを引き、手の上で無骨な金属光沢を弄ぶ。

その一連の動作にアタシの願望も捨てたモンじゃないと自画自

賛する一方、その立場になるのはアタシだったのになんて悔しさも感じる。

なにせ、いちどらなりたくてもなれなかつたアタシを田の当たりにしてるわけですよ。

ゲシコペンストと書ひ事もあるんだろひナビ、こはとこかく生徒にモテる。

さりに町を歩けば人が振り返る。

まあ、一部はその格好が気になつて振り返つてるんだろひ と、思いたいが。

「…何だかなあ」

強さと見た田と、ついでに不老かどつかは知らんが不死属性を備えてりや、そりや憧れにもなるだろひ。

だから田々のハつ当たりの一つか一つか、許して欲しい。

むしろ許せ。

「候補生さん？」

「あ、はい」

黙つて座つてゐるアタシが気になつたんだろひ、ガンスミスがアタシに声をかけてきた。

案の定、ちらりとエンブレムを確認される。

」によると、カラーを感覚的に認識できるのは相当に高い感性の持ち主だけで、そうじやない場合、「何か威圧感」とか「何か空氣みたいな存在感」とかしか察せ無いそうだ。

だから、行き交う人々の中に飛びぬけて力のある人がいても、そういう直ぐには判らない。

高位のミーティアムになると、相當に遠くからでも一発で気付けるらしいけど。

「色々大変だつたみたいね。大丈夫？」

「…はい」

同情的なガンスミスの言葉に、素直にうなずいてみせるアタシ。

アタシがヘッドだと書ひ事は黙つてゐるよう、アデリアさんに念

を押されてる。

理由は簡単だ。

ヘッドを人質に、ゲシュペNSTを脅迫する奴が出ないようになるため。

ゲシュペNSTはナイダスと拮抗できる数少ない力だから、そのヘッドも貴重品扱い。

それならSP付きで保護すりやいいじゃんと思うし、実際にそうなるヘッドもいるらしいけど、どこに行くにも何をするにも確認責めに遭うのは元世界でウンザリしてたので、アタシはパスさせてもらつた。

「ショックは抜けたかい？」

「はい」

アデリアさんの提案で、アタシの肩書きは孤児、しかもナイダスと化したコロニーの出身だと言う事にしてある。

ゲルナームについての知識が乏しいのは、その時のショックで色々忘れてしまったから。

そんなシナリオを用意してくれたアデリアさんはマジ感謝。付け焼き刃で住民のフリしたつてボロ出るしね。

無知を憚らなくていいってのは気楽だ。

「しかし、君も罪作りだねえジャック。こんないたいけな子を没つてくるなんて。無事だつたかい？ 候補生さん」

「晴子です」

「晴子さん。大変だうと思つけど、文句はヘッドに会つまで溜めておいてね」

と、心底悪気の無い微笑を向けられ、アタシは思わず下を向いた。すいません、そのヘッド＝アタシなんです。

そうネタバラシできるワケもなく、とりあえず口を噤む。何だこのブーメラン。

アタシの望みつて、こんな恥ずかしいモノだつたっけか。

「時にジャック、コルティジヤーナ達からお誘いが来ているよ

「何ですか？それ」

「高級娼婦。僕は断り続けてるんだけどね、ジャックは人気者だか  
ら」

……。

「そ、そっちの方面でモテたいと思つた事は…っ！」  
無くは無いけど、やっぱり望む方向間違えた！

武器商人の名前はミゲル。

彼もミーティアムで、カラーリとしてサンセシット<sup>橙</sup>に当たると黒づ。

そんな彼いわく、」が変態。

」いわく、ミゲルさんが変態。

ミゲルさん、女性に好かれそうな雰囲気なのに、武器にしか愛を感じないと言う変な人でした。

その分、腕は確からしいんだけど。

「晴子さん、生身フュチのジャックは変だよね

「セーロに同意を求めるな」

ええ、求められても困りましたよ。

だいたい生身フュチって何だ、三次元愛が全部変態みたいじゃないか。

「そんなに武器がいいんですか？」

「そりやあね。ほら、手入れが悪いと女も武器も機嫌を損ねるだろう？ 女は愚痴を引き摺るが、武器は宥めてやれば素直になる。全くもつて天地の差だよ。タイマーの鼓動は纖細だし、剛健な中に気紛れさを秘めた銃機なんて、身勝手な乙女よりも我慢で力強い。惚れない理由なんてないじゃないか」

いや…真顔で力説されても困ります。

とりあえず、この話題どこかに放り投げられないかなー、と視線をさまよわせていたアタシを救つたのは、試し撃ちでの切り絵をしていた」だった。

遊んでないで早く助けに来い。

器用なのは認めるが。

「いい調整だな、ミゲル」

「愛ですから」

……。

「……この人家に連れて来ないでね」

「大丈夫だ、ミゲルがお前に興味持つ事は無エ」

「アタシが心配してんのはそっちじゃねエ！ライサだ！」

「そんなに自意識過剰に見えますかと視線で訴えるアタシを余所に、さつさと会計を済ませる」。

「そのスルーフ通りに文句を言おうとしたアタシの目に、ふと、」

「が買い上げた小さな銃が映った」。

「ずんぐりとしたフォルムに小さめの口径。短めの銃身も相まって、玩具のようにも見える銃」。

「それがコルトポケットと言つ名の銃をモデルにした物である事は、随分と後になつてから知つた」。

「そんなの使うの」

「ああ、改造しようかと」

「……本当に玩具扱いか」。

「まあ、」の楽しみと言えばクリーチャー殴りに行くかどこかに遊びに行くか、ぬぐぬぐとマガジン読んでるかのどれかだから、多分暇なんだろう。

「余裕あるな」。

「武器持つてる奴つて、他にもいるよね？」

「カウンターの奥で何やら最終調整をしているミゲルさんを見つつ、」

「へと質問を投げかける」。

「？」

「ん？ ああ。ミーディアムは大抵な」

「余所見中だつたか」。

「そんな」に口を尖らせて、アタシは小さく溜息をついた。

「アタシも一個ぐらい持とうかなあ」

「散々、俺を吹ツ飛ばしといて何言つてんだ」

「ショットで切り出した金属板、もとい猫のシルエット型のものを、ぴし、とアタシに突き付ける」。

「それをペいつと手で払つて、アタシはふと息をついた」。

「でも」、ダメージ受けてないじゃん」

「少しほ受けてる。あの程度じゃ死なんが、ダメージ蓄積すりや動けなくなるわ」

「どれぐらい?」

「……」

アンタが悩んでどうする。

「でも、何か持つてないと落ち着かないなあ。街中で急に撃たれるとか嫌だし」

「無い。使えるのはミーティアムや俺達だけだ。他の連中じゃ調整すらできん」

聞けば、売り物の銃は基本的にそのままだと暴発する状態なのだと言つ。

それを所持者が術的に書き換えて、よつやくまともに作動する仕組みらしい。

その”書き換え方”は学院でしか学べず、結果として何かあつたらミーティアムかその関係者だと判るんだとか。

アタシも書き換えたいなあ、と羨ましがつたら、が意地悪く笑つた。

「上に行くには、精神力要るぞ」

パスです。

ただでさえ後ろ向きな人生、いまさら前を向く気なんてございません。

そんな調子で買い物を済ませ、よつやく繁華街に繰り出した頃には、街がすっかり夜になつていた。

「うわ

人、多つ！

商店街のメインストリートに出た途端、真つ先にそう思った。

身動き取れないほど緊くはない。けど、そりで輝くイルミネーションライトが目に眩しい。

高々とそびえるビル、呼び込みの声で華やぐ店頭。色とりどりの品を並べたショーケースの中には、それらを引き立てるような装飾が施されている。

ゲルナームの第五街区 アタシやアデリアさんが住んでいる場所をそう呼ぶらしいが その中でも、ここは中規模にあたる商店街なんだと言う。

一応、自分のいた文明がモデルなのに、まるで別世界を見ている感覺だった。

家から出なくなつて長いアタシにとつては、元々別世界だったけど

「ん？」

「武器が要る世界なのに、みんな結構楽しそうだな」アタシの印象だと、もつとこつ…陰鬱な、世紀末的な顔して生きる人が多くていい気がしたのに。

なのに、みんなわりと普通に日常を楽しんでる。

信号待ちしたり、露店で買い物したり、笑い合つたりあ、あそこのクレープ美味しそうとか、甘い匂いに誘われるアタシも危機感皆無だったけど。

「怖くねえのかな」

「戦う相手が相手だからな」

「ナイダス？」

天災と等しく訪れる死の象徴。

その名前を口にすると、ノが軽くうなずいた。

「勝手に発生する病気相手に、普段から怯えまくつて生活してる奴なんていねエだろ」

まあ、確かに…。

明日風邪引いてそれこじらせて死ぬかも!とか、明日寒くなるか

らそれで風邪引いて以下略とか思いながら生活するって想像つかない。

「だ、だけどさ。そつ言つレベルの問題じやないじゃん、地域一個なくなるんだよ?」

「地域一個無くなつても、避難した奴は別の場所で生活するだろ。だいたい、隣の家の奴が風邪こじらせて死ぬだけで、次は自分かもなんて怯える奴いんのか」

いませんね。

「それなら、根源を探して倒すとか!」

「病の根源つてあるのか?」

……ない、ね。

野生動物から感染する病気なんてのもアタシの世界にはあつたけど、だからって、野生動物を全滅させたつて解決にはならない。

そうした物が悪魔の仕業だと信じられてた時代なら「魔王倒しに行くぞ!」みたいな運動もあつたかもだけど、いかんせんナンセンスだ。

「いつか罹る病。いつか起きる不運。いつか来る天災。それに日々怯えた所で不毛なだけだ」

そう、ポケットに両手突っ込んで言つ」の声はさばけてた。

その背中を追うアタシの足が重くなる。止まる。

アーケードを流れる明るいBGMが、一いつ言つ時はそらぞらしく

聞こえる

「……そうだね」

確かに、アタシは人の病死を時に他人事だと思つ。でも、それとこれとは、何かが違うような気がしてた。

アタシの世界はすごく狭い。  
でも、物知り顔で世界を語っている大人だって、きっと全てをわかつちやいないだろう。

確信はないけど、そう思つてた。

… そう、思ひたかつたのかも知れない。

「J」

「ん？」

「J」は、どにまでアタシの事知つてるんだ？」  
「お前が、俺の元を考え始めた頃からだな」  
そうなると、人生リセットしたいと思ひ始めた辺りか。

「……」

ちらりとJを見上げる。  
と、笑顔のJと目が合つた。

思わず視線を反らす。

それから戻す。

やつぱり、そこにあるのはJの優しげな笑顔

「……」

く…黒歴史筒抜け！？

「全部、知つて…る？」

「そりや あな」

…つ！

さらつと言つてんじやねえ！

「忘れろつー今すぐ忘れろおおつー！」

「無理だ」

「あつさり言うなーどつかに頭打つて来い！」

「再生するから無理だ」

無理でも忘れやがれアホンダラ！

そうまくし立てるアタシに対し、この反応は超ナチュラル。

だからどうした的なその顔が、余計にアタシの頭に血を昇らせた。ウツフンな場面見られたどころの騒ぎじゃねえぞコレ。

覗きだよ、罪だよ、ちょっとアタシ涙出て来たよ。

「そんなに恥ずかしがる事か？」

「ざけんな！アタシだって恥ずかしいもんは恥ずかしいわっ！・プログラマー返せ！」

一回その頭の中身洗いなおして来い！と

ひとしきり喚いた所で、アタシはぐつたりと肩を落とした。

「…最低」

「そう生まれたんだから文句言つなつて

言います。

実に許せん、と尙も愚痴を並べて息をつく。

「だいたい、生まれつき記憶があるって方が気持ち悪くね？」

「セーハはどうだ？」

何でそこで問い合わせ返しますか。

「正真正銘、生まれてから普通に生きて来たんだから、いきなり記憶があつたら違和感あるよ」

「小せえ頃の記憶は？生まれてスグとか」

「…ない」

「怖いか？」

「別に」

「…だつて一歳一歳の頃の記憶なんて、思い出さうとしても思い出せやしない。」

その頃は幸せだったのかも知れなけれど、そんな宝石を掘り出す氣にもなれない。

その事を控えめに告げると、一が小さく声を立てて笑つた。

「それと同じだ」

物心ついた時から時間が連続していく、それが自分だと言ひ認識があつて、それ以上でもそれ以下でもない。

さらりとそう切り返すのは、アタシよりずっと大人びて見えた。

「いるか？他の説明」

「いる。けどその前にクレープ買って来る」

ちょっと今まで武装民だらけだと思っていた雑踏も、安心してしまえば普通の人の群れに過ぎない。

だからこを残し、アタシは急ぎ足に、甘い匂いを振りまく魅惑の源へと駆け寄つた。

ワゴンの側面が開き、それが屋根になる形式の販売車。

その屋根にかけられたひさしの中に、セール中の丸文字が踊つている。

客と向かい合つよにして設置されたクレープ台の横で、新鮮な色を見せる果物はそのままで魅力的。

そんな誘惑満載の店に並んだ十人ほどの客の最後尾につき、ポップな音楽を聞きながらアタシは財布を取り出した。

アタシの小遣いは、主にJ-達と一緒に行くナイダス破壊の報酬から出でている。

あれだけの労力をかけるんだから一生遊んで暮らせる程の収入があるのかと思いきや、アデリアさんがほとんどボランティア的に受けて来るので、それほど高額では無いんだそうだ。

もつたいたい。

「アデリアさんぐらいい頑張つてるなら、もつと褒められてもいいと思つんだけどなあ」

目立つのは苦手だと言うアデリアさんの言葉を裏付けるかのようには、アデリアさんの存在は近所でもほとんど知られていない。

肉屋のおばちゃんとのついで話でも、スーパーの店員さんとの雑談でも、ごく自然な感じで話題から外されているような印象を受ける。

例えるなら、限りなく存在感の淡い一般人。

「何か影が薄いんだよなあ、こう…」

いるんだけど目立たない、みたいな。

でも良く考えたら、ある意味アタシも学校にとつてそんな状態だつたと思い出す。

いかん、暗くなるから忘れよつ。

「何にしようかな」

幸いにして、今のアタシはプチセレブだ。

金持ちだ。

甘味ハシゴだつてどんと来いーの勢いで残金を確かめていゆと、不意に聞き覚えのある声が耳に届いた。

「晴子?」

「ツアーラー...」

夕方、あんな別れ方をしたせいだらう。

反射的に声が硬くなる。

「ツアーラ、あのセ」

「おーじるわ

く?

「おーじるわよ。何がいい?」

「...はあ」

その時のアタシは、ものすごい間抜け顔だつたと思う。

そんなアタシをまじまじと見てから、ふいとツアーラが視線を落とした。

「...悪かつたと思つてゐるの」

「あ、はい」

「敬語抜きでね」

「うん」

ごめん、と謝つてツアーラを見る。

無表情で店のメニューを見上げる彼女の横顔が、その時、思いの他寂しそうに見えた。

「選んで、晴子」

「じゃあ、苺クリーム」

「苺クリーム二つ」

あれ、同じのでいいんだ。

そう思いつつ、店員がクレープを焼くのを見ながら並んで待つ。くるくると平たく伸ばされる生地が何気に楽しい。買い物いなんて久しづりだと胸を躍らせていたら、ぽつりとシマーラが小声で囁いた。

「私も同じよ。孤兎なの」

「……」

「少し、話さない？」

「うん……」

そう答えて、ふとこのいた辺りを振り返る。

けれど、店に並ぶ人の列が邪魔で、ここからは姿が見えなかつた。

「いいよ、話そう」

いつもアタシを困らせてるっだもの、たまには困らせたつて許されるよね。

なんて、少し浮かんだ罪悪感を飲み込んで、アタシはこのいる方とは別方面に歩き出した。

再会（後書き）

今年一年、読みに来て下さった方、本当にありがとうございました  
（・・・）

来年度も、宜しければお付き合いで願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6804y/>

---

ここが願いの終着点

2011年12月27日20時48分発行